



④文房具の展望を語るココヨ S & T 広報担当の石丸さん

④ハリナックス (ハンディタイプ)
⑤綴じ目はこんな感じに (2穴タイプ)

生活の中にあるヒットのヒント

文房具メーカーは、より便利な商品を提供すべく努力を重ねている。中でも従来の常識を覆すアイテムが、ココヨS & Tの商品「ハリナックス」だ。針を使わないステープラーとして話題になり、日経BP社が発行する月間情報誌「日経トレンド」が選ぶ「2010年ヒット商品ベスト30」で9位を獲得。商品はいかにして作られたのか、ココヨS & T広報担当の石丸可奈子さんにお話を伺った。

エコ商品を目指して

「ハリナックスを作る最初のきっかけは社会的な環境意識の高まりです」。ユーザーが無意識のうちに環境に貢献できるような商品を作ろうと、製作に取りかかったそうだ。

こうして、環境に優しい文房具の開発に着手する。企業を対象に文房具に関する調査を行ったところ「書類をシュレッダーにかける際、ステープラーの針を外して廃棄するのが面倒だ」という意見が挙がりました。そこから、分別廃棄が不要のステープラーを作ることになった。

針を使わないために

ハリナックスで最も注目したいのが綴じ方だ。当時、針を使わないステープラーは、3、4枚綴じが主流だったが、ハリナックス2穴タイプでは10枚綴じまで可能にした。綴じ方は、従来書類に穴を開けて中に紙を通すというプロセスを採用しているが、穴に紙を通す際、綴じる枚数が増えるほど紙が厚くなり紙が破れてしまう。ハリナックスは刃の形状を工夫し、紙を観音開きに切れるようにすることで10枚綴じを成功させた。

この方法は、開発者が子供とペーパー

クラフトで遊んでいた時に発見したという。開発者は、新しいアイデアを発案するため常に身近な物事に目をやり、頭の中で考えを巡らせているのだ。

しかし、商品化する過程で困難に直面する。「10枚の書類を綴じられ、かつ保持力のある商品を作るためには2カ所を綴じる必要がありました。一方で、ユーザーの書類に2つも穴を開けてしまうという欠点が生じたのです」。そこで、穴をパンチ穴の幅に合わせて、書類をそのままファイルに保管できるようにした。発想の転換で、欠点を有効的に使えるようにしたのだ。

そして2010年7月には、ハンディタイプ4枚綴じを、11年5月には同タイプ8枚綴じのハリナックスを発売。2穴タイプはオフィスでの使用を想定した大きさだったが、今回は幅広い年齢層の人が使えるサイズになっている。このように、メーカーは消費者の視点に立ち、改良点を模索し続けている。

商品開発にあたって

多くのヒット商品を世に生み出してきたココヨ。その秘訣はどこにあるのか。

「現在はお客様の多様な要求への対応と、さらなる付加価値が必要な時代です。とことんお客様の声を聞いて意見を反映させることを意識しています」という。キーワードに「『誰に』『何が』ちょうど良いか」を掲げ、明確にターゲットを絞り込み、その層に特化した商品作りを目指しているそうだ。

開発された商品は、一目で多くの人を引きつける工夫がされている。「他と一線を画す際立ったポイントが今、商品に求められています。特別な機能を持った

商品は、色々な人が興味を示してくれますから」。

これからの進化

パソコンやスマートフォンなどの普及による文房具の需要低下が懸念されている。

それでも「デジタル化の需要には対応していきたいですが、これを文房具の危機とはあまり考えていません」と笑顔で答えてくれた。ノートに文字を書く、手を使う行為はなくなると考えているそうだ。

文房具の魅力の一つに、使う時の手触り、目や耳で楽しめることがあるという。ハリナックスの場合には、紙を綴じる時にサクッと音がするのが良い！という声が多く寄せられたそうだ。「こういう感覚は、なかなか電子機器では味わえないものです。電子文房具が評価される一方で、ノートや筆記具の価値が見直され、需要も増えてきています」

用途に合わせた使い分けによって、両者の需要と質が高められていく。文房具業界にとって、これほど刺激になることはないだろう。

最後に、ヒット商品のヒントは私たちの何気ない生活の一コマに隠れていると語る。「文房具には、まだお客様も気づいていない不便なことがたくさんあると思います。それらを見つけ出して、解決できる商品を今後も作っていきましょう」と力強い言葉をいただいた。

企業と消費者の声が一体となって作り出される文房具には、あらゆる可能性がある。そして、これから先もあっと驚くような進化を遂げるだろう。今後の動向に目が離せない。

ハリナックスができるまで



- ① まずはコンセプトを形に
- ② 刃の性能をテスト
- ③ かなり原形に近づいてきた!
- ④ ハンドルの形状選びにも妥協はない
- ⑤ ハリナックスついに完成!!

編集後記

今まで文房具にそれほど関心がなかった人も、この特集を読んで、少しでも見方が変わったのではないだろうか。この取材を通して、私たちは普段何気なく使っている文房具の奥深さを改めて知ることになった。

ふと自分の筆箱に目をやると、多種多様な文房具が入っていることに気がつく。ペ

電子化進んでも、変わらぬ愛着

ン、ハサミ、クリップ……。それらを手にすると、売り場で一目惚れした時のことを思い出す。使い込むうちに愛着がわき、替えの効かない存在となっているという思いを抱いた。

ニーズに応え、製作に情熱を注ぐ企業がある一方、それをこよなく愛し、使う私たちがいる。この関係は電子化が進んだ未来

でも変わらないだろう。そして、文房具をより便利なものへと進化させ続けるのだ。

毎日使う文房具。本来の機能はもちろんのこと、それ以外にも多くの魅力がある。ペンで書く時の滑らかさ、ハサミで切る爽快感、クリップでまとめ上げる達成感。文房具の醍醐味とは、私たちにそうした感覚をもたらすところにあるのだろう。

学習院大学新聞社
構成 加藤絵梨香
記事 川島 旺洋
高橋 弘一
深澤 知代
増山 詩織
森田 祥乃
取材 飯村 涉
石塚 貴之
関根 一馬
写真 伊藤 友喜